

‘copula’としての「なる」とその周辺

池上嘉彦:日本言語学会(2025年11月(於:岡山大学))

1. ‘copula’としての「なる」

Quirk, Greenbaum, Leech, Svartvik(1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*, 16. 21.

‘copula’を ‘current’ と ‘resultant’ の2種に分類

‘current’ <現状の> (‘happening or existing now’)

‘resultant’ <結果として生じる／生じた> (‘happening or existing because of something’)

例文: ‘She is still trying to get over the attack and the resultant injuries’ (LDOCE)

‘current’: *appear, feel, look, remain, seem, smell, sound, taste.*

‘resultant’: *‘become, get, go, grow, turn, make. (e.g. ‘She made him a good husband, because she made him a good wife.)*

2. 「なる」と「変わる」

「(九州の南方海上にあって停滞していた)熱帯低気圧が(昨夜)台風になり、(北上し始めました。)(テレビでの天気予報)

・「熱帯低気圧が台風になる」

「熱帯低気圧が台風になる」

「熱帯低気圧が台風に発達する」

・? 「子供が大人になる」 (Cf. 「子供が大人に代わる」、「子供を大人に替える」)

「子供が大人になる」

「子供が大人に育つ」

<話者>が{なる}、あるいは「変わる」という語彙項目を選ぶことによって<出来事>(event) — つまり、何かが<発生する>(happen)という現象 — について語るとする場合、両者の間でどのように違った受けとめ方がなされているのであろうか。<出来事>という現象について、認知的に (cognitively) どのように違った<事態把握>(construal)がなされるのであろうか。文法的に「なる」は ‘copula’ という部類のものであるのに対し、「変わる」はごく普通に<動詞>とよばれるものである。この差は、両者の間でどのように違った<事態把握>をすることになるのであろうか。

一般に、<変化>(change)と呼ばれうる現象が話者によって語られる場合には、話者が「なる」という語によって<言語化する>(verbalize)ことも、「変わる」という語によって<言語化>する(例えば、「年号が平成から令和になった／変わった」)こともある一方、「熱帯低気圧が台風になった／変わった」のように「なる」は適切であるが、「変わる」はいくらか違和感を感じさせるのではないかと思われることもある。この点はどのように説明できるのであろうか。

3. <過程>(process)という概念

この段階で有効なのは、<過程>と呼ばれる概念を導入することではないかと思われる。<過程>(process)は、<変化>とそれに伴って生じる(新しい)<状態>(state)とがつぎつぎと連鎖状に付け加わって進行していく(proceed)という<勢(いきおい)>を孕んだ>(つまり、<動的>(dynamic)な)出来事(event)である。最終的には、ある<変化>(change)の<結果>(result)として生じる／生じた(merge(d))／現れる／出現する／出来(しゅったい)する(appear)ある<状態>に至った段階で進行が止まる(stop)／止む(cease)。

(参考(『岩波古語辞典』より「止む」):「雨・風などの自然現象や病気などが、自然に絶えて消え去る意。類義語トマルは、動きがそこまでで停止するけれども、動きの主体は、そのままそこにあるの意。」 Cf.「うちてし止まむ」(『古事記』より。戦時中、もてはやされた文言)。

ただし、<過程>という現象(<出来事>)の理解のためには、さらに考慮しておくべき点が二つある。

一つは、<過程>と呼ばれるものを構成する、さまざま<変化>から生じたさまざまに異なる<状態>からなる連鎖状のつながり — そのような連鎖の(いわば)「根底にあって、持続的、本質的なもの」としてあり続ける<実体>(substance)、あるいは<基体>(substrate)と呼びうるものが想定されうる場合(例えば、<子供が大人になる>という<過程>の根底には、<子供>、<大人>はいずれも<人間>であるという<実体>／<基体>が前提として想定されていること)があるということ。(Cf.「おたまじゃくしが蛙になる／ぼうぶらが蚊になる。」)

<変化>が「なる」という語によって<言語化>される際には、そのような制約が伴っているのが普通と思われる。「なる」という語の使用が、しばしば<達成>感を伴うもの(e.g.「世紀の大事業なる」)になる一方、<(運命として)不可避(unavoidable)な出来事>として<無力感>、<諦感>を帯びたものにもなったりするのも、そのような制約の故であろう。

もう一つ、‘copula’としての「なる」について注目しておくべき点とは、(既に言及した)Quirk et al. (1985)で、英語の ‘become’ が ‘copula’ として(‘stative’ と対比される) ‘resultant’ という項目に分類されているということである。

実は、英語の ‘result’ (そして、それに対応するとされる日本語の「結果」)という語には問題があるということなのである。Jespersen (1923: 12.21)には、‘object of result’ ということでは ‘build a house’、‘paint a picture’、‘write a letter’、‘develop a photo’、‘beget a son」といった類の例を挙げているのであるが、このような場合を<結果の目的語>と呼ぶのは何か適確でないという印象を受けるのではない。(残る問題:自動詞の場合は、例えば「歌う／舞う」という<行為>をしていれば自然に「歌／舞」という<結果>が生じるのであるが、他動詞の「掘る」という<行為>の場合は、ただ「掘る」という<行為>を続けていけば、「堀／濠」と呼ばれるものが<結果>として生じるということではない。行為者は一定の意図に従って行為するということが条件で、<結果>はその意図に沿ったものでなくてはならず、何でもよいからとにかく<結果>が出ればよいということではない。) Jespersen (1923: 12.12)は、‘object of result’ という英語での術語としての言い方について、自分はドイツ語の ‘Ergebnisobjekt’ (あるいは、‘effizientes Objekt’) という言い方を念頭に置いて言っていると注記している — 『ドイツ言語学辞典』(紀伊國屋書店、1994: 19)には、次のような記述がある:

affizientes Objekt (被動目的語): 動詞によって表現される行為から影響を受ける対象のこと

(e.g. Ich lese einen Brief.)

effizientes Objekt (被成目的語): 動詞によって表現される行為によってはじめて生じる対象

(e.g. Ich schreibe einen Brief.)

Cf. 「因果関係 ≠ 原因と結果」: ‘cause and effect’ (‘Ursache und Wirkung’)/ *‘cause and result’ (*‘Ursache und Resultät’) (作用－反作用: Wirkung – Gegenwirkung)

英語の ‘result’ には(ドイツ語の ‘Wirkung’ (作用)のような強い意味はない: ‘result’ (defined as ‘something that happens because of something that happened before’ vs. ‘effect’ (defined as ‘a change that is caused by an event, action, etc.’ (LDOCE). Cf. ‘direct result’, ‘get results’ (cf. 「結果(成果)ヲ出ス). ただし、英語の動詞としての ‘result’ には、‘result in ~’ という形で<結果として~が生じる>という強い意味合いが表わされるし、その意味合いは、現在分詞形で形容詞として用いられる resulting や resultant には引き継がれている。

Jespersen (1963: 12.21)によって ‘object of result’ として挙げられている例を改めて見返してみると、その種の構文に共通して読みとれる意味的特徴として<生成>という概念が浮かび上がってくる —— 例えば、‘build a house’ というのは ‘build’ という<行為>の結果として ‘house’ というのは ‘house’ というものが生じるということ、‘write a letter’ というのは ‘write’ という<行為>の結果として ‘letter’ というものが生じるということ —— 共通して認められる意味的特徴は<行為>の直接の結果として何らかの対象が生み出されるということ —— この意味的特徴を<生成> (generation) という術語で呼ぶことにする。(この ‘generation’ という語は<世代>という意味で知られているのと同じ語であるが、ここではその名詞形が派生されるもととなっている ‘generate’ という動詞の意味をそのまま受け継いだもの) —— その形容詞形の ‘generative’ は ‘generative grammar’ (生成文法) という名で知られている。(ただし、ここでは<生成文法>と呼ばれているものとは直接の関係はない)。それよりも、ここでいう<生成>という意味特徴は ‘make a dress’ という例にみられるような意味での ‘make’ という動詞によって代表されうるものということ —— つまり、<行為>を意味する動詞の代表が DO であるということと並立するような形で、MAKE は<生成>を意味する動詞の代表であるという認識に立つということ。(Cf. Hopper and Thompson (1980)、西光・バルデンシ (2015).)

(参考)

- (i) ‘make a bow’, ‘make a promise’, ‘make fuss’ などの make には、本来の<生成>の意味合いを読み取ることが可能 —— ‘do exercise’, ‘do research’, ‘do shopping’ との対比にも注目。
- (ii) 英語で ‘What are you doing?’ に対してドイツ語では ‘Was machen Sie?’ 英語での do と make の対比に較べると、ドイツ語での tun と machen の対比では tun の方の制約が目立つ。しかし、英語でも使役動詞としての do の使用は古英語以降は make にとって代わられた。フランス語では, faire が<する>、<つくる>、<使役>の意味で使われる。
- (iii) 英語で ‘nod approval’, ‘wave good-bye’ などを<同族目的>とする考え方があるが、目的語が表わしているのは、<結果>と言うより、<生成>されるためである。日本語でも類例として「十字ヲ切ル」「手刀ヲ切ル」「醜ノ四肢(シコ)ヲ踏ム」などを参照。
- (iv) ‘cognate subject’ (Quirk et al.: 1985: 10.29 注(b)): ‘cognate object’ として ‘sing a song’, ‘live a good life’, ‘fight a clean fight’ などを例として挙げた後の注に、「稀な場合ではあるが、動詞によって想定されているのが主語であるような場合」として ‘The frost froze hard’, ‘Day dawned’, ‘The wind is blowing’ といった例文が引用されている。索引では ‘cognate subject’ という名称でこの部分が記載されている。日本

語でも、「風が吹ク」、「朝明ケ」(cf.「夜明ケ」)、「年明ケ」、「年ガ明ケル」、「明クル日ノ年」などは同様の
場合として扱える。そして、この場合も<主語>によって表されているのは<出来事>の<結末>で
あるというよりは、既に「舞イヲ舞ウ」について見たように、<舞ウ>という行為が、とりも直さず、その
まま<舞イ>という<出来事>を発生させる——こういう<生成>の場合、しかもそれがそのもっとも
根元的な場合である自然界そのものの現象について適用された場合と受けとめるのが妥当であろう。

上古の日本語では、自然現象を表わす動詞の連用形からそれと意味的に対応する名詞を派生するとい
う営みは、ごく普通であった(cf.「きる」と「きり」、「くもる」と「くもり」、「かすむ」と「かすみ」、「かげろ
ふ」と「かげろひ」、など)。「霧キル」、「霞カスム」のような冗語的な用例はされないようであるが、「霧
立ツ」、「霞タナビク」のような用例はふつうである。これらの表現も自然現象が自然生起するという根
元的な<生成>を言語化した場合と言えよう。

「雨フル／ヤム」、「海荒ル／凪グ」、「日／月照ル」なども類例として考えてもよいであろう。さらに拡
げてよければ、「桜咲ク／散ル」、「鶯這フ／延ブ」なども十分に注目し得る場合であろう。「咲ク」は「栄
カク」、「盛(サカ)ル」、「幸(サキハ)ヒ」と同根。「這フ」は、「入(ハイ)ル」、「侍(ハベ)ル」、「這フ這フノ
体(テイ)」さらに、「生(ハ)ユ」、「生(ハ)ヤス」→「早シ／速シ」→「林」、「隣」。「生ユ」「映(ハ)ユ」(現
代の「インスタ映エ」)。

4. 「つくる」―「生む」／「生まれる」―「なる」という概念系列

ここまでは、もっぱら<なる>と<変わる>という二つの特定の語を対比しながら、それらが<話者>
によって使用される場合、それぞれでどのように違った<事態把握>がなされているのか、と
いう観点からの説明を試みてきた。そして前節の終わりで、‘copula’としての「なる」については、
‘resultant’ — つまり、(直接の)結果として(新たな)事態の<発生>にまで至る<過程> — である
ことを確認した。

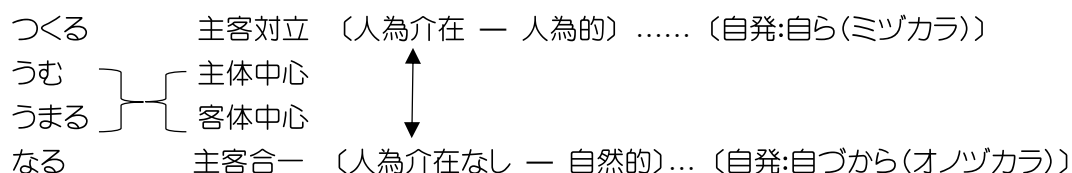
ところで、ここで ‘resultant’と呼ばれている<過程>は、決して「なる」という語だけに特徴的に
認められるというようなものではない。例えば、「つくる」という語によって語られる出来事にも同様の
<過程>が関与していること — つまり、この場合はまず、人が関与するという形での営みが一
つの<過程>として始められ、進められ、その直接の<結果>として何らかの<(新たな)ものの出現>
ということでもって<過程>が終了するというわけである。「なる」という語で言語化される<過
程>と「つくる」という語で言語化される<過程>は基本的に同型であり、ただ違うのは、後者では
<人為>の関与が想定されているのに対し、前者では(<人為>の関与はなく)<過程>は<自然>
に(あるいは、もう少し具体的に言うと)<自然生起>的に進行すると受けとめられる。

「なる」、「つくる」と言語化をされる<過程>には、<自然(発生)的>と<人為的>という対立
項が関与していることを確認したうえで、ひとまず、この点は差し置いて、本体の<過程>その
ものについて、「なる」、「つくる」以外、どのような語のよって<言語化>がなされるか、を検討した
い。

まず、<つくる> — <うむ> — 「なる」という概念系列が法学分野の丸山真男「歴史意識の
「古層」」(1972)と題された論文で提示をされたことは周知のとおりである。この論考の第一節「基底
範疇の A ——— なる・なりゆく」の冒頭で「世界の諸神話にある宇宙(天地万物人間をふくむ)の創
成論」に認められるとする三つの類型として挙げられているもので、それぞれ、「人格的創始者によっ
て一定の目的でつくられたもの」、「神々の生殖行為で生まれたもの」、「世界に内在する神秘的な靈
力の作用で具現したもの」を指している。

この〈つくる〉 — 〈うむ〉 — 〈なる〉という概念系列が言語学的に見て興味深いのは、それが〈創成〉と呼びうる(本稿では〈生成〉と読みかえる)営みを、そこで当座の問題とされている〈国土創造〉という特定の営みに限ることなく、新しいものがつくり出されるという過程をもっと一般的な視点で捉える枠組みを与えてくれるからである。まず、〈つくる側〉と〈つくられる側〉という区別のない、いうならば〈主客合一〉の状態で何かが〈自然〉に出現するという、「なる」の段階、最後には、〈つくる側〉と〈つくられる側〉が分離して〈主客対立〉の構図が成立、その上で〈主体〉としてのヒトが〈客体〉としてのモノを自らにとっては〈他者〉なるものとして(ただし、なお自らが所有し、統御可能なく他者〉として)〈人為的〉に〈つくる〉という段階 —— そしてこの二つの段階の中間を占めるものとして、ヒトが自らにとって完全なく他者〉とは言い難い自らの分身を分娩という完全に〈人為的〉とは言い難い、生物としては〈自然〉の営みとしての〈うむ〉の段階がある —— こういう構図を想定することができよう。

この構図で興味深いのは、〈出現〉／〈出来〉と呼びうる事態把握に関わる〈なる〉 — 〈うむ〉 — 〈つくる〉という概念系列では、自動詞「なる」と他動詞「うむ」、「つくる」が共同して参与しているということである。いま、もう一つ「うまる」(〈現代語「うまれる」)という語を系列に加えてみると、「なる」 — 「うまる」という二つの自動詞と「うむ」 — 「つくる」という二つの他動詞とが対称的に参与するという構成が得られる:



構成を支えているのは、〈主客対立〉対〈主客合一〉と〈人為〉対〈自然〉という二つの対立軸である。そこでは、二つの軸によって、四つの段階が(下から上へ)当初の〈主客合一〉の状況が解消され、〈主客対立〉の状況へと展開されていくという流れ、そして背後でその流れを生み出しているのが過程への〈ヒト〉の主体的な介入であることが示されている。

このように図示してみても気づくのは、日本語の文法において「態」(voice)に関わる概念としてしばしば論じられている〈自発〉の位置づけについて、一つの示唆が得られるのではないかということである。筆者が提言したいのは、上古の日本語で〈出現〉／〈出来〉と呼びうる事態把握のために供される概念系列から成る構成図で最下部を構成する〈なる〉の部分、つまり、〈主客合一〉の状態にあつて〈内発的〉な形で、そして〈人為的〉な介入なしに全く〈自然(生起的)〉に、モノ／コトが生じるという段階(小松 2013 [1999]) —— そういふところが〈自発〉と呼びうる領域となるはずである。

〔参考〕

本稿の関心からすると、〈同族目的語〉についてもっとも興味をひかれるのは、述語動詞とその目的語が(その名称からも読みとれるように)語源が共通のものに由来しているということよりも、〈出現〉／〈出来〉と呼びうる事態把握を表わすという機能を有しているということ(例えば、‘sing a song’という表現では、〈歌う〉という本来〈自動詞〉的な行為から〈歌〉というものが生み出されてくるという含み)である。そして、(場合によっては、‘The wind blows’のように)主語とその述語動詞との間にも同じ意味機能が託されうること(つまり、〈吹く〉という現象があれば、とりもおさず、そこに〈風〉というものが存在すること)である。述語動詞の表示するコトと主語の表示するモノの間に密接な関係があるということでは、述語動詞の表わすコトと目的語の表わすモノの間に密接な関

係があることをいう<同族目的語>と呼ばれる場合との類似はあるが、‘The wind blows’や「風が吹く」の場合には両者の間で語源が共通という条件は必要でないから、<同族主語>といった述語をこの種の場合に適用するのは適切ではない。この場合、主語の表示するモノと動詞の表示するコとの間にあるのは、前者の有する何らかの重要な属性が後者によって示される(つまり、後者は前者に対してその重要な ‘defining features’ の一つである)ということである。しかも、後者が前者にとってのどの程度 ‘defining’ な特徴であるかについては、場合によってさまざまな程度差がありうる。「風(ガ)吹ク」、「火(ガ)燃エル(←燃ユ)」、「花(ガ)咲ク」、「実(ガ)ナル」、「苔(ガ)ムス」、「霜(ガ)置ク」などでは、名詞と動詞の親近性は極めて高い。「日(ガ)暮レル(←暮ル)」、「川(ガ)流レル(←流ル)」、「雪(ガ)降ル」、「雨(ガ)ヤム」、「月(ガ)照ル」、「夜(ガ)更ケル(←更ク)」などもかなり高い。実はこれらの表現で表されるのが、自然界における<自然生起>的な現象として典型的な場合なのであろう。狭義の自然現象を越えて植物の営みの多くも、このレベルで認識されるのであろう。動物に関わる場合でも、「鳥(ガ)啼ク」、「鳥(ガ)飛ブ」、などは自然界の風物として受けとめられたようで、「鹿(ガ)鳴ク」、「蛙(かわず)(ガ)鳴ク」、「馬(ガ)イナナク」、「虎(ガ)ホエル(←ホユ)」なども同様であったのかも知れない。この種の自然界の出来事は、ヒトとの関わりで受けとめられると、<自然生起>の意味合いにく(ヒトにとって)制御不可能 (uncontrollable)>という意味合いが読み込まれることになる。それから、さらに感覚、知覚、思考といったヒト特有の営みの中にも<自然生起>という受けとめが微妙な修正がなされて受け入れられていくということになるだろう。

[追記]

1. <植物>の生態に対する思い込めというのは、世界のさまざまな文化圏を通して見た場合、どのようなものなのか、文化圏の存在する気候帯が違えば、当然思い込みも違った姿になるであろうことは十分に想像できるが、人間の生活にとって<植物>がその衣食住すべての側面において基本的に関わってくるものであることを思えば、何らかの思い込みの対象にならないでいるとは考えられない。(Cf. 三浦 (2023)、池上 (2023))

ここでは、全くささやかな断片的な事例であるが、今回の取り組みの間に、英語について気づいた具体的な類例に短く言及しておく。

植物における<繁茂>と人事における<繁栄>/<繁盛>:flourish 1. (事業などが)繁盛する>、2. (植物などが)よく育つ;luxuriance 『文語』 繁茂, luxuriant 『文語』 1. 繁茂した、2. 華やかな;thrive (事業などが)繁盛する、(植物などが)よく成育する。flourish はフランス語 (flour(花) + ish)からの借入語。現在では、<繁茂>の意味の使用のほうが高頻度。luxuriant / luxuriance はラテン語からの借入。ラテン語での多義性を継承。thrive はスカンディナヴィア語からの借入。(なお、thrift(倹約), thrifty(つましい)も同根であるが<繁盛>→<倹約>という意味変化は英語への借入後のことらしい。)

一般的な意味での<勢>を含意するような語としては、sweep (e.g. The winds swept across the plains.), cease (cf. ceasefire, ceaselessly)などが興味深い。(Cf. Hjertholm (2023))

2. この機会につけ加えておきたいもう一つの問題がある。これは半世紀ばかりの昔に B.L. Whorf の<言語的相対論>に関する論考の日本語訳を手がけていた折に経験したことである。

その種の論考の一つに、‘An American Indian Model of Universe’ (Whorf 1956[執筆は 1936 年頃]と題されたものがある。そこでは、Whorf はまず<時間>(time)という概念について、西欧で普通言われているような ‘kinetic one-dimensional uniformly and perpetually flowing time’ といった受けとめ方は Hopi 族の場合、なされていない。それに対応するのは、‘MANIFESTED’ (顕現ずみの段階にあるもの)と ‘MANIFESTING’ (顕現への途上にあるもの) (ないしは、‘UNMANIFEST’ (未顕現の段階にあるもの))とを対立させるという捉え方であって、「Hopi 族の人たちに言わせると」この二つの段階の対立と前者から後者への進化は、「人間の『魂』(heart)の中だけでなく、動物、植物、無生物の魂の中、そして自然のあらゆる形、姿の裏(behind)や内部(within)にあって、自然の魂の中にも現れ、存在する」と言うのである。Whorf 自身も断っている通り、この種の発想は確かに「アニミズム」(animism)とか「活力論」

(vitalism)的なものと感じられるが、Hopi 族の人たちは、これらの営みすべては宇宙の中核にある ‘hikwst’ (息の霊 (spirit of the Breath)) の働きによると考えるようである。

Whorf がその論考の中で論じている細かい点については、まだ整理できないものも残るが、大筋で言えば、Whorf の言う ‘manifestation’ は、本稿で論じた (現在では衰退してしまっている) <出現> / <出来> 型の「なる」の <自発> の意味合いに相当すると言えるのではないであろうか。

参考文献

池上嘉彦 (2022). 「言語横断的に見た日本語動詞『なる』の生態 (中間報告)」菅井三実・八木橋宏勇 (編) 『認知言語学の未来へ向けて ― 辻幸夫教授退職記念論文集』東京: 開拓社, 2-15.

池上嘉彦 (2023). 「<なる> と <いきほひ> ― 丸山真男「歴史意識の『古層』に寄せて」『認知言語学研究』9, 101-118.

池上嘉彦 (2025). 「日本語動詞「なる」の生態 ― <生成> の動詞としてのその側面」関東学院大学経営学会『経営・教養論集』第5・6巻 (中村桃子教授退職記念号), 1-9.

池上嘉彦 (2025). 「「ナル的表現」と事態把握」守屋三千代・池上嘉彦 (編集代表) 『「ナル的表現」をめぐる通言語的研究―認知言語学と哲学を視野に入れて』東京: ひつじ書房.

小田 勝 (2015). 『古典文法総覧』東京: 和泉書院.

小松英雄 (2013 [1999]). 『日本語はなぜ変化するか―母語としての日本語の歴史』東京: 笠間書院.

西光義弘、プラシャント・パルデシ (編) (2015). 『自動詞・他動詞の対照』東京: くろしお出版.

丸山真男 (1972). 「歴史思想の『古層』」丸山真男 (編). 『日本の思想 第6巻 歴史思想集』東京: 筑摩書房, 3-47.

三浦佑之 (2023). 『古事記: 神話から読む古代人の心』東京: NHK 出版.

竹内整一 (2023 [2007]) 『「おのずから」と「みずから」』ちくま書房.

Hjertholm, P. (2023) *A history of the cultural travels of energy – From Aristotle to the OED*, New York, Routledge.

Hopper, P. and S. Thompson (1980). Transitivity in grammar and discourse, *Language* 56.

Ikegami, Y. (1979). Source vs. Goal: a case of linguistic dissymmetry. Dirven, R. & G. Radden (eds.) *Concepts of case*. Tübingen: Gunter Narr, 122-146.

Ikegami, Y. (2023). The ecology of the verb ‘naru’ in crosslinguistic perspective. M. Oberwinkler et al. (eds.) *Festschrift für Professor Viktoria Eschbach-Szabo*. Tübingen: Gunter Narr.

Jespersen O. (1927). *A modern English grammar*, Part III, London: George Allen & Unwin.

Quirk, R., Greenbaum, S., Leech, G., and Svartvik, J. (1975). *A comprehensive grammar of the English language*. London: Longman.

Whorf, B. L. (1956). *Language, thought, and reality*. Cambridge, MA: MIT Press.

(付録:『新明解国語辞典』より、参考例:「熱帯低気圧」熱帯地方に発生する低気圧。主として海上で発生し、移動性のものが多い。発達すれば、台風・ハリケーン・サイクロンなどになる。)

〔付録〕

「ナル」という語が適用されるのは、ある時点で X であったモノ／コトがそれ以後のある時点で Y というモノ／コトに変わっているという事態である。この事態を(1)のように表示し、その読みを「X カラ Y ニナル」とする。X と Y の間をつなぐ矢印のついた横線は、X から Y への＜変化＞の過程である：

(1) X ———→ Y (X カラ Y ニナル)

(1)のような事態が言語化される際には、話者には X が Y のいずれかを＜話題＞(topic)化するという選択がある。いずれの項が＜話題＞とされるかによって、残るもう一方の項は、＜起点＞、または＜到達点＞という意味付けがされることになり、それぞれに与えられる読みは、(2)に示したようになる：

(2) a. X (起点) ———→ Y (話題) (X カラ Y ガナル)

b. X (話題) ———→ Y (到達点) (X ガ Y ニナル)

この二つは、日本語の動詞「ナル」による＜事態把握＞の営みにおいて、もっとも基本的なレベルで出てくる二つの対立する型である。(日本語以外でも、「ナル」相当の語彙項目を有する場合には、同様な状況が認められる。)必要ならば、(2a)を＜起点想定型＞、(2b)を＜到達点想定型＞と呼ぶことにする。

個別言語について見た場合、この二つの型がどの言語でも同じ程度に自然な表現として使えるとは限らない。X と Y に具体的な語彙項目を入れて文を作ってみると分かる通り、現代日本語では(2b)型の「子供(X)が大人(Y)ニナル」はごく自然な表現であるが、(2a)型の「子供(X)カラ大人(Y)ガナル」はそうではない。(しかし、少し思案すれば(そして多少の古文の素養があれば、さらに容易に)意図されている意味は見当がつく。)ドイツ語では、(2a)型(Kinder werden Leute(直訳:子供が大人ニナル))と(2b)型(Aus Kindern werden Leute(直訳:子供カラ大人ガナル))の間には、文体的な差はあるであろうが、日本語の場合ほどの自然さの差は持たれないようである。

＜起点言及型＞と＜到達点言及型＞という二つの対立型で基本的に重要なことは、両者は＜事態把握＞の仕方が異なっており、したがって、たとえ同一の事態に適用される場合でも、それから生じる意味合いは同じではない、ということである。前者(つまり、＜X カラ Y ガナル＞)の適用によって生み出されるのは「X から Y が生じる」という意味合い —— 名詞形でいえば、＜出現＞／＜出来(しゅったい)＞(emergence, manifestation)といった意味合い —— 後者(つまり、＜X ガ Y ニナル＞)によって生み出されるのは「X が Y になる」という意味合い —— 名詞形でいえば、＜移行＞(shift)、＜推移＞(transition)といった意味合いである。そこでは、動詞「なる」によってなされる＜事態把握＞の基本的な二つの型が、それぞれ次のような意味合いによって特徴づけられているという記述ができる。

(2a)＜起点想定型＞(X カラ Y ガナル):＜出現＞／＜出来＞

(2b)＜到達点想定型＞(X ガ Y ニナル):＜移行＞／＜推移＞

上記の(2a)（＜出現＞／＜出来＞と呼ばれうる意味合いでの＜事態把握＞に供される場合）と(2b)（＜移行＞／＜推移＞と呼ばれうる意味合いでの＜事態把握＞に供される場合）という並立は、日本語の動詞「なる」（特に、その上古での用法）に限らず、アルタイ語系の言語での「なる」相当動詞に広く認められる。比較的身近な外国語だと、ドイツ語の werden もそうである。英語では、werden と同根の古英語の weorþan は同様であったが、中英語以降それにとって代わった現代英語の become やフランス語の devenir には妥当しない。(英語の ‘What will become of us?’ という表現は多分「借用翻訳」(calque)として生じたもの。フランス語では、‘Qu’allons nous devenir?’ と＜到達点想定型＞である。日本語の「なる」の場合の(2a)と(2b)の対立という状況を観察してみてもすぐ気がつくのは、(2b)が比較的安定して定着しているのとは対照的に、(2a)はかなり不安定な型であるという印象を受ける。具体的な用例としてそれぞれの型がどの程度実現をされているかを見てみると、＜出現＞／＜出来＞と意味合いに関わる(2a)の方には(2b)の場合より著

しく多くの制約があるように思える。『古事記』の冒頭部で神々の系譜が語られる場合は、次々に現われ出てくる神々の名前が「次になります神は…」という語り方で提示される。しかし、人間界での系譜の記述ではそのような「なる」の使い方はなされない。現在のアルタイ語系の言語(それから、日本語のすぐ隣の韓国語でも)＜王としての即位＞は「王(ガ)ナル」、＜春の到来＞は「春(ガ)ナル」という言い方を(つまり、＜出現＞／＜出来＞という捉え方で処理する)ようであるが、日本語では「王ニナル」、「春ニナル」のように＜移行＞／＜推移＞としての捉え方を(する。実は「実ガナル」という言い方は(＜自然＞な過程を経ての)＜出現＞／＜出来＞という捉え方を具現する言い方が現在まで日常的な言い方として残っている珍しい例ということになるらしい。(新聞などで見かけられる「世紀の大事業なる」といった表現は明らかに文語的である。そして「実ガナル」という言い方自体も「実ニナル」という(2b)型の言い方にその存在を脅かされているかもしれない。)(2a)型で＜出現＞／＜出来＞を言う多くの表現は、日本語では、文献に残る前にすたれてしまったのであろうか。

ここでもう一度、(2a)＜X カラ Y ガナル＞:＜出現＞／＜出来＞型という記述に立ち戻って考えてみたい。これまで見てきた通り、(2a)型の＜事態把握＞から受け止められる意味合いは＜出現＞／＜出来＞である。しかし、実は、こういう意味合いで典型的に受け止められるのは、X が＜ゼロ＞(つまり、＜無＞)である場合であろう。もともと何も存在しないところに(あるいは、ところから)Y が現われ出て存在が確認されるということであれば、間違いなく＜出現＞という受け止め方が妥当する。(因みに、『古事記』の神代の時期の記述で繰り返し出てくる「次に御眼になります神は…」の類の表現での「御眼」は「なる」とされる事象の起こった＜場所＞であって、X(つまり、変化する以前のモノ／コト)ではない。しかし、もし、最初からXというモノ／コトが存在していて、それが後に姿を変えるなどして、異なるモノ／コトになったとしたら、どうであろうか。そのような場合であっても、もしそれが観察者によって従来とは＜変った＞モノ／コトとしてではなく、＜新しい＞価値を担ったモノ／コトであると認識されれば、それが＜新しい＞モノ／コトの＜出現＞として受けとめられてもおかしくない。＜新しい＞という認識と＜変った＞という認識とは＜新しく変った＞と＜変った新しい＞という形で相互に重複し合い、相互に再解釈されうる。

日本語の「なる」という動詞の生態の長い歴史の間で、そのような再解釈が起こったのではないか。具体的にいえば、「X カラ Y ガナル」(起点言及型)と「X ガ Y ニナル」(到達点言及型)という並立する二つの型の間で、前者が＜有徴＞(marked)、後者が＜無徴＞(unmarked)という差が生じ、それが引金となって、前者の型が後者の型にリセットされる、ただし、その際、後者には「X ガ Y ニナル」という既に安定した言い回しがあるので、それとの(意味的な)差異化を保つべく、「X ガ Y トナル」という助詞の部分だけが違う言い回しが選ばれたのではないか、という推定である。

そういう推定を支えうと思える一つの証拠として、「X ガ Y トナル」という言い回しを「X ガ Y ニナル」という言い回しと較べてみると、両者の間でYとして起こりうる語句にかなり顕著な差異があるのが分かる。「X ガ Y トナル」という言い方は、「X ガ Y ニナル」という言い方の場合と較べて、制約が遥かに強いのである。まず、形容詞の連用形への承接は、助詞が介入するいずれの場合にも不可能である(e.g.「大キク／美シクナル」と「*大キク／*美シク ニ／ト ナル」)。名詞への承接はいずれも基本的には可能で、特に知覚の対象となりうるものを表わす＜具体名詞＞とは、両者ともごく自然に承接する(「石／煙ニナル」、「石／煙トナル」)が、抽象概念を表わす＜抽象名詞＞では、「…ニナル」との接続は問題ない(e.g.「静カ／幸福ニナル」)が、「…トナル」との接続は不自然である(e.g.「*静カ／*幸福トナル」)。「…ニナル」の＜無徴性＞に対して、「…トナル」におけるこのよう＜有徴性＞は、後者が衰退した＜出現＞／＜出来＞の「X カラ Y ガナル」型の表現と何らかの特別な関係があることを示唆しているように思える。

他方では、「…ニナル」と「…トナル」の対立に関して後者は＜漢文訓読調＞であるという記述がよく見かけられる。この点については、たしかにそのような印象を受けると述べる以上に、そのいきさつ等に関して論じるだけの用意は著者にはない。ただ、その背後にあるのは、「…トナル」という表現であれば、述べら

れているモノ／コトの変化がそこでひとまず一区切りという歯切れの良さが感じられるのに対して、「…ニナル」の方は(それが<無徴的>な表現であることからして)まだその後も繰り返されうる変化のひとこまという含みを残した言い方という印象を与えるのであろう。この一つの打ちどめといった感じは、「…トナル」が「…ガナル」という言い方から継承した<出現>／<出来>の意味合いによるものではなかろうか。

ところで、「…ニナル」と並立する「…トナル」という言い方の「ト」はどのような機能の助詞であろうか。「ニ」と並立することから<格助詞>、そしてもし<格助詞>ということであるならば、助詞「ト」に通常付与される<共格>(comitative)を機能とする表示(e.g.「子ト遊ぶ」)と考えたいところである。しかし、「…トナル」という言い方の場合にはとても妥当するとは思えない。筆者が提案したいのは、「…トナル」という言い方における「ト」の機能は、例えば「…ト言ウ」という表現で「ト」は先行する部分が<引用>(quotation)であることを表示する「ト」との場合と同じ——それがいくらか拡張されたものということである。つまり、「ト」によって承接される言語表現はそれを埋め込んでいる周囲の言語表現とは<メタ言語的>(metalinguistic)に異質な使い方をされていることに注意喚起をするもの、ということである。例えば、「塵も積もれば山となる」という表現では、「山トナル」は「山ト言ッテヨイヨウナモノ」、「山ト呼ベルヨウナモノ」のようにパラフレーズが可能である。このことから分かるのは、この場合の「山」という語は通常の地形的な意味ではなく、<比喩>的に使われているということが示唆されているということである。「…トナル」と同じ含意での「ト」の使用は、「降る雪と紛うばかりに散る桜の花」、「雨と降る弾丸」などといった場合にも認められよう。そして、このような機能は、例えば「放射能の少ない(いわゆる)『きれいな』原子爆弾」という場合のような引用符の機能との類似は明らかであろう。

最後に、もう一点付け加えておきたいことがある。少し前に<起点想定型>(XカラYガナル)について、Xが<ゼロ>(Yガナル)、ないし<不明>((?カラ)Yガナル)の場合は過程全体を典型的に<出現>／<出来>と呼ぶことができると述べた。これに対して、Xがいかなるものかが明確に把握されているということなら、過程全体はいかなる意味合いを帯びることになるのか。多分<完成>ないし<成就>とも呼ぶのがよいのではないだろうか。そうすると、(2a)<起点想定型>(XカラYガナル):<出現>／<出来>というのは、次のように(2a)と(2a')に下位区分され、それらが(2b)と並ぶことになる:

(2a)<起点想定型>(XカラYガナル):<完成>／<成就>

(2a')<起点想定型>((Ø/?)カラYガナル):<出現>／<出来>

(2b)<到達点想定型>(XガYニナル):<移行>／<推移>

この三区分は、丸山(1972)で言及されている本居宣長による古代日本語の「なる」の意味区分に一致する:

「一つには無(なか)りし者の生(な)り出るを伝ふ。(人の産出(うまるる)を云ふも是なり)、神の成坐(ます)と云は其意なり。二つには此物のかはりて彼物に変化(なる)を云ふ…。三つには作事(なすこと)の成終るを云ふ…。」

宣長によるこの三区分は、上記の(2a')、(2b)、(2a)に対応する。